

第1分科会 学校への支援（小中学校と公共図書館の情報ネットワーク）

司会者：棟田聖子（松川村図書館）

発表者：小川清美（駒ヶ根市立図書館）・天野 恵（東御市立図書館）

1 発表の概要

＜駒ヶ根市立図書館＞ 「学校への支援」～小・中学校と図書館との情報ネットワーク～

- ・平成18年度に指定管理者制度導入。本館と学校図書館の司書の人事は駒ヶ根市文化財団で実施。（本館と学校図書館の人事異動もある）
- ・公共図書館と学校図書館の職員間の情報交換を促進している。また、学校への支援は、「第二次子ども読書活動推進計画」の一環として実施している。
- ・推進計画の5つの柱は、①ブックスタート事業（6ヶ月児）、②セカンドブック（2歳6ヶ月児）、③保育園を対象とした「よみーくちゃん巡回図書事業」、④さらに新たに開始したサードブック事業（小学校入学時お勧め本リストのプレゼント）、⑤学校の「朝読書の推進」を実施。また、駒ヶ根市で第3水曜日を、「家族読書の日」として制定している。
- ・図書館は、人・資料・情報が大切であり、資料費の獲得には努力をしている。公共図書館は、30代40代の子育て世代（女性）の利用が比較的多い傾向。小学校の一人当たりの蔵書数、児童一人当たりの図書費用については、全国平均をかなり上回っている。図書館を毎日利用する児童も10%から20%に増加するなど一定の成果が得られている。

＜東御市立図書館＞ 公共図書館における学校への支援～小中学校と公共図書館の情報ネットワーク～

- ・平成24年11月1日に、市役所庁舎と合築して、新築移転しており、蔵書にICタグを貼付し管理することを導入した。自動貸出機の利用率は約5割。約12万4000冊の蔵書があり、約4割が絵本を含む児童書である。
- ・エコールを利用した、「蔵書の検索・予約・貸出」等の学校連携の支援、東御市独自の取組として、クラス貸出し（学級文庫の提供）、調べ学習への支援がある。
- ・学校間でのシステムを利用した貸出・予約等の連携や、公共図書館から学校図書館への予約はできないルールで運用している。
- ・クラス貸出しは、東御市内の5つの小学校が対象となり、一クラス50冊を上限として、学期ごとに入れ替えを行う。貸出期間は3ヶ月であり、対象の資料（約4000冊）は東御市立図書館の蔵書に限定している。（東御市立図書館の学校担当の職員2名で担当）
- ・学校への貸出し期間が長いと、図書館本館に蔵書がある期間が短くなる。公共図書館来館者へのサービスを考えると課題が残る。

2 討議の概要

- ・各館における学校支援の実情について ＜情報交換＞
- ・学校への支援のネットワークが形成されている地域とそうでない地域があり、ネットワークができている地域については、公共図書館から学校に貸出しを行い、学校内で閲覧する形態と、さらに学校から生徒に貸出しをする形態があるが、情報も管理されている。ネットワークづくりについては、各地域で話題にすることはあっても、経費や物流（資料の運搬、回送）の具体的な方法に話が及ぶとなかなか進まない。
- ・公共図書館と学校図書館の連携については、公共図書館から学校図書館への支援は共通しているが、学校図書館相互の連携については、考え方の違いがあった。

- ### 3 まとめ
- 公共図書館と学校図書館との情報交換を進めるとともに、新たにシステムを構築していくためには、政策化や予算面での対応も必要になる。また、連携システムの構築が図書館の人員減・資料費減にならないよう配慮する必要がある。システム更新時のタイミングや、各地域の住民の皆さんのサービス向上につながる部分を整理し、住民の要望内容などのデータを、このような場で、お互いに情報交換を重ねていくことが重要である。

第2分科会 シンポジウム「地域資料のデジタル化と活用・保存について」

コーディネーター：宮下明彦（長野県図書館協会）

司会者：丸山松良（中野市立図書館）

パネリスト：小松芳郎（松本市文書館）

槌賀基範（県立長野図書館）

加藤みゆき（飯田市立中央図書館）

石坂憲司（信州大学附属図書館）（発表順）

1、発表の概要

①松本市文書館 ～長野県地域史資料データベース構築・公開事業～

「長野県を知るための地域史資料100冊」とコンテンツづくりが公益財団法人図書館

振興財団事業に採択され（競争率6倍）25～27年度事業として調査構築中。

図書館・博物館・文書館・学校などの書庫に眠る貴重な地域史資料のデータベースを構築・公開し、誰でも読めて検索できるシステムづくりにより、地域学習・副教材・学習講座などに活用し、住民に還元してゆく。

②県立長野図書館 ～「信州デジくら」（長野県デジタルアーカイブ推進事業）について～

観光資源・伝統産業情報発信が発端となり、長野県の貴重資料デジタル化を実施。

画像・映像資料が各メディアで利用されている。

③飯田市立中央図書館 ～地域資料の活用と保存（市民と資料を結ぶ試み）～

緊急雇用創出事業を活用して、21年度から5年間事業として実施。

○郷土新聞・郷土雑誌（170誌）のデジタル化・マイクロ化

○貴重資料目録のHP公開 ○特別資料展示 ○パスファインダー・資料リストの活用等を実施し、所蔵資料を市民に還元する。

④信州大学附属図書館 ～信州大学機関リポジトリについて～

論文入手や研究者検索等に活用。

遺跡資料や山岳関係資料など、地域資料のデジタル運用公開実施。

2、討議の概要

①デジタル化の必要性和潮流、今後の図書館等への影響

加藤：紙ベースからデジタルベースへ、用紙印刷をしない電子版保存も必要。

高齢者・障がい者へのサービスや、予算確保も重要。

宮下：図書館や各施設の書庫に眠っていた資料を住民に還元することが重要。

図書館に来館しなくてもサービスが受けられる、ネットを通じたサービスの必要性。

②デジタル化する際に必要なもの（専門的知識・事業費・著作権 等）

小松：解読技術を取得する前に、職員が自館の地域資料の存在をどれだけ把握しているかが重要。（デジタル化されても原本に勝るものはない。）

石坂：サーバー管理からコンテンツ管理の時代、研修会にて知識取得。

③意見・質疑応答

宮下（飯田）「リポジトリへの掲載は有償か？」⇒出版社に確認

川島（長野）「地域史資料100冊をどう活用できるか、期待している。」

矢崎（茅野）「自炊処理を使って、安価なデジタル化はできないのか？」⇒著作権と資料数

④今後の取り組み予定、後続図書館へのアドバイス

石坂：クラウド型管理／槌賀：事業予算確保／小松：1冊しかない原本を大切にしたい

3、まとめ

書店と図書館の違いのひとつは、蓄積した資料を住民が活用できるか否かにあり、地域資料のデジタル化はその利用の一環である。

第3分科会

- ①親子の触れ合いを深めるために
- ②心を豊かにする絵本との出会い

助言者 服部雅恵（JP I C 読書アドバイザー）
司会者 山口恭子（大町市大町幼稚園）
発表者 ①勝野敬子（大町市立しらかば保育園）
②青木美喜（大町市大町幼稚園）

1 発表の概要

○しらかば保育園 ～おかあさん、この本読んで～

子育て支援の一環とし絵本を利用し親子の触れ合いを深める。

1 かえで文庫設立（長野県安心子ども基金事業の補助金利用して購入した絵本）
を文庫としてかしだす。

2 参観日を利用し市立図書館へ親子で行く。

3 絵本の貸し出しの時に親子ふれあいカードを作る。

4 一年間の貸し出し集計を年齢別にランキングにし報告する。

5 一年間の記念に親子で「りんごの木」を制作する。

○大町幼稚園 ～豊かな感性を求めて～

親しんできた絵本（さるかに合戦）から、表現あそびにつなげていくまでの事例は発表

2 討議の概要

取り組みの様子や日ごろ感じていることを意見交換

- ・絵本の貸し出しをほとんどの市町村が行っている。
- ・学校では保護者が自分の好きな絵本を選び読み聞かせを行っていたり、ボランティアの方が見えて、読み聞かせを行っている。低学年高学年と毎回楽しみにしていて、しっかり聞いてくれるのだが、読み手として本選びに悩んでいる。
- ・親子で年2回読書週間を行っている学校もある。
- ・絵本のコーナーを設け好きな時に読んでいるが、遊びの一部になっている。
- ・PTA母親文庫は、今東信しかないので存続していきたい。

3 まとめ（助言者の指導）

- ・子どもも親も昔と変わってきた。（親が絵本を読んであげる姿勢がない。）
- ・世界には不幸な子どもが大勢いる中、絵本を読めることに感謝したい。
- ・学校では本を学習につなげていきたい。
- ・読書支援の取り組みをしていることはよい。（しらかば保育園）
- ・さるが活着しているとその物語が繰り返し続いてしまうので完結にするには、「死」も大事になる。（大町幼稚園）

第4分科会

司書教諭の仕事

助言者

発表者（司会者）



小林 洋子（長野市立城東小学校）

司書教諭委員会



渡邊 佳代（飯山養護学校）

花岡 直美（佐久市立野沢中学校）

山崎 久子（長野市立北部中学校）

樋本めぐみ（飯田市立旭が丘中学校）

森田 奈苗（大町市立大町東小学校）

田口 直美（木曽町立開田小学校）

1 発表の概要

司書教諭委員会の皆さんによる実践発表の後、その実践に基づいて本を紹介するポップ作りを体験した。

(1) 司書教諭委員のみなさんによる実践発表

① 「司書教諭の仕事～校長講話と連携した取り組み～」 （森田奈苗先生）

- ・当該校の校長先生は、校長講話で本を使って話をすることが多い。
- ・耐震化工事のための、3ヶ月間のお弁当生活が始まる前、校長講話で『なきみそ校長と弁当の日』が紹介された。学級担任はおたよりで子どもたちの思いを家庭に伝え、図書館司書はお弁当作りの本を展示紹介し、栄養士はお弁当作りに取り組む健康教育を進めるなど、それぞれの立場からできることを探して、学校全体の取り組みに広がった。

② 「小学部たんぽぽ組のおはなしタイム」 （渡邊佳代先生）

- ・毎日の生活の中に、おはなしタイムが位置づいている。
- ・大きな画面で挿絵を見せたり、拡大コピーして絵巻物風につなげたり、紙芝居やパネルシアターを作ったりすることで、見やすくするとともに、調理や体ほぐしなど、様々な活動へと発展させていった。

③ 「司書教諭としての役割」 （山崎久子先生）

- ・国語科を中心として、生徒の読書活動を豊かにするための研究を推進している。
- ・読書感想文を書く際には、先生方のお薦め本を提示し、選書の参考にさせている。
- ・しっかりと読み込んだ作品の読書感想文から、それを生かして友だちがその本を読みたくするような工夫を重ねてポップ作りを行った。
- ・平安堂と連携し、店頭に置かれているポップを写真に撮って見たり、使わなくなったポップを借りたりして、作る時の参考にした。
- ・図書館に展示→平安堂に展示、ということを前提にして学習に取り組み、意欲的に行えた。目的意識が明確になり、作成意欲が高まったと考えられる。
- ・実際に展示している様子が長野市民新聞に掲載され、大きな反響があった。



(2) ポップ作り

- ・司書教諭委員会の皆さんが用意してくださった本と材料で、ポップ作りを行った。筆記用具、画用紙などが自由に選べ、ポップ作りの参考図書もあり、楽しんで取り組めた。
- ・本の内容に合わせて、招待状風、半立体、絵や色使いなどが工夫され、主題を効果的に伝える作品ができあがり、先生方の発想の豊かさが大変参考になった。ぜひ実践してみたいと思った。



2 まとめ（助言者のご指導）

- ・校長の意識が、学校運営に大きな影響を与える。図書館教育を位置づけていきたい。
- ・いろいろな子どもがいる中で、どの子にとっても読書活動が行えるよう、司書教諭としてどのような活動、働きかけができるか、自分自身に問いかけていきたい。
- ・中学生が書店と連携して本物を意識し、表現への意欲付けが行えている。読書感想文のテーマや本の選び方にとっても手が入っている。
- ・ポップ作り実践の時間はとても楽しく、集中できた。教師自身が本に興味を持つことが大事であり、学校研修でやってみてはどうか。
- ・図書館が子どもたちにとって生きる場になるようにしていきたい。

第5分科会	司書教諭と学校司書
助言者	関間 昇（長野市立浅川小学校）
司会者	大塩 貴子（朝日村立朝日小学校）
発表者	宮坂 文子（富士見町立富士見小学校）
	塚田 貴子（千曲市立戸倉上山田中学校）

1 発表の概要

＜宮坂 文子先生のレポート＞

研究テーマ：学校図書館活用のための司書教諭と学校司書の連携

◇現状と課題

現状では司書教諭は学級担任を兼務、多忙の中連絡を取りにくい面がある。常勤の学校司書がおり、学級担任から司書に本を頼まれることはあまりない。学級担任と学校司書を繋ぐ方法、読書指導以外で図書館を利用してもらうにはどうしたらよいか。

◇学級担任と学校司書を繋ぐための取り組み

- ・各学年の年間学習指導計画をもとに図書館年間利用指導計画を作成して推進している。
- ・「資料準備カード」を司書に渡し、図書館利用のきっかけにした。6年生の学習の特設コーナー等、司書教諭が動くことで本も動く。子供たちの興味関心が高まってきている。

＜塚田 貴子先生のレポート＞

研究テーマ：学校図書館の4つの役割と司書教諭と司書の連携

◇4つの役割の実践事例

- ① 「学習センターとして」図書館での授業を計画した教科担任に対し、必要な資料の収集を司書に依頼し、市内のネットワークとも連携しながら進めている。
- ② 「情報センターとして」生徒指導上LINEについてのトラブルや生活の乱れが話題になった時、図書館よりLINEに関する記事や本を収集し発信していった。
- ③ 「読書支援として」読書旬間に全職員から本を紹介していただく計画を立てる等、職員が図書館に足を向けてもらえるような工夫を進める。好きな先生の本を読む姿も見られた。
- ④ 「陰の役割」図書館がクラス以外の子とも関わりを持つ場になっている。度を超えない範囲で会話も許可している。コーナーを作り教室に入れない子の居場所にもなっている。

2 討論の概要

Aグループ

主な話題になったことは、調べ学習における単元に必要な系統的な資料の提供について、司書の事務処理の多忙さ、勤務形態の柔軟性、年間指導計画の活性化等であった。

Bグループ

司書教諭の時間の捻出の工夫という観点から様々な角度から討議がなされた。選書、購入の実際、連絡カード（司書と司書教諭を繋ぐ）の活用、学級担任との連携等。

Cグループ

自校の悩みや実践の実際について意見を交換し合った。各校が工夫した実践を発表頂く中で、中学校からは図書館の本の紛失とその対策が話題になった。

3 まとめ（助言者の指導を含む）

- ・ 特定の教科や単元のみならず、どの教科、どの先生にも授業に活用していったほしい。自校の生徒の興味関心を把握しながら、進路や哲学、歴史等様々に目を向けさせていきたい。
- ・ 中学校の男子生徒も徐々に図書館に来られる様になってきているのは望ましいが、休憩時間など単なる逃げ場にならないように気をつけていきたい。
- ・ 図書館の利用推進を一層進めていく上で、司書教諭と学校司書の連携は益々大切になっていくので、様々な研修の機会を増やし情報共有を活発にしていきたい。

第6分科会

「司書の立場からの授業支援」

助言者 鈴木 明 (長野市立豊栄小学校)

司会者 橋詰 みずほ (松本市立寿小学校)

発表者 米山 篤美 (中川村立中川小学校) 小林 智美 (安曇野私立三郷中学校)

城石 莊子 (中野市中野平中学校) 深澤 純子 (長野市加茂小学校)

1. 発表の概要

(城石) 司書は図書館の管理運営だけではない。学力観を持って教科との連携を。

(小林) 「おすすめ100」を作ったところ、それを使って単元を組んだ先生がいた。

(米山) 中学は司書が意図して図書館について触れさせないといけないという思いで、

思いがけない物を資料として収集している。それを教師と連携するために紹介する。全職員朝読書に週一回読み聞かせを行っている。その他ブックトーク実演。

(深澤) 読み聞かせの選書は同じ題材でも、必ず2種類以上比較検討。微妙なニュアンスの違いも考えて決定している。もっと分かりやすくできないか模索中。

2. 討議の概要

A～Fのグループ討議。後で討議内容について発表。

- ・図書館たんていだんの達成度は年ごとに違う。担任によっても違う。
- ・ブックリストがあると、読書旬間などで喜ぶかもしれない。
- ・ブックトークや読み聞かせのあと、利用できているか調べたい。
- ・読み聞かせの時間を確保したい。
- ・台本板はどうしているか。
- ・別置は必要だが多すぎる。本探しに子どもも困っている。他ではどうしているか。
- ・雑誌の付録はどうしているか。
- ・中学は受験に向けて図書館利用率が落ちる。
- ・公共図書館との連携を進めたい。
- ・学級・教科担任との連携が難しい。
- ・選書、特にケータイ小説はどう扱っているか。
- ・「やってよかった」と思わせるようにしたい。

3. まとめ

新学習指導要領で言語活動の充実が謳われている。その他資料や図書の準備が必要になっている。そして、学級・教科担任との連携が必要だが、難しいのが現状。打破するために、まず、関係の職員とつながることを意識してみるとよい。

教科書に目を通すことが大事。学習に必要な物を知った上で、資料の用意をしていくことが肝要。

司書の立場が安定していず、働きにくい環境にある学校が多いので、今後も地位向上を訴えていきたい

第7分科会 図書館運営のあり方

司会者 北村 直子（小川村立小川小学校）

1 発表の概要

（1）木曽町立三岳小学校 発表者 市川 忠宏

①図書館位置：校舎の中央部にあり、吹き抜けの開けた空間

②朝の15分間読書（始業前）

③図書委員会の活動：おすすめ本紹介・読み聞かせ・読書クイズ

④司書・司書教諭による工夫：おすすめ本の紹介・国語の授業で行ったことは廊下に掲示

⑤公民館事業：町の図書館として、毎週水曜日に一般開放している。

→年間230人～360人の利用があり、地域に開かれた図書館となっている。

[ボランティア団体：LO BOOK 華丸]

小学校、保育園での読み聞かせ、図書の選書、図書館開放日に一派貸し出し業務の補助を行っている三岳町の図書館ボランティア団体。

（2）飯田市立飯田西中学校 発表者 牧野 祐子

テーマ：生徒・教師にとって魅力あり、役立つ図書館

①環境整備の工夫：「明るく、きれいで、楽しく、親しみやすく、日々変化して、役立ち、やる気が出る、そして癒しの場となる」ような図書館作り

②読みたい本がある図書館：生徒達が読みたい本を揃えるために、購入希望調査、会話の中から読書傾向や興味をつかむ。新刊本案内、アピールプレート
の活用。

③読書の楽しさが分かる図書館：本の紹介活動、司書によるおすすめ本紹介、9分類以外の本の紹介・活用、読書旬間等を利用した職員の本の紹介

④じっくり本に浸れる図書館：朝の全校7分間読書の中で各クラス毎月1回は図書館で読書

⑤教育活動を支える図書館：「いじめについて考えるコーナー」「国語の教科書に関するコーナー」「鳥に関するコーナー」「進路・キャリア教育コーナー」「中体連応援」「修学旅行応援」「オリンピック応援」等

⑥生徒・教師にとって役立つ図書館：授業を支援する図書館として→教科等の授業に活用できる本の紹介と購入、教科指導の支援

⑦生涯学習につなげる図書館：家でも本を読む子供達を育てる

2 協議内容

（1）木曽町立三岳小学校の実践について

- ・町図書館としての小学校図書館のメリットとデメリット→小規模校ならではの取り組みであり、地域の方と触れ合ういい機会となっている。
- ・図書館が広いため、児童の図書館利用と、町民の利用の時間が一緒になることに問題はないが大規模校では難しい。

（2）飯田市立飯田西中学校の実践について

- ・生徒の「こんな図書館あったらいいな」に耳を傾けることが魅力ある図書館作りにつながる。全校アンケートをとることで、生徒の傾向がわかる。
- ・中学生には小中校間の情報交換・兄弟関係で家庭読書への取り組むことで中学でも小学校の時に積み上げてきた読書習慣を継続させる工夫はよい。
- ・装飾や掲示の工夫は、目で楽しみ図書館への興味を持たせるために、とても効果的である。

8 分科会 「読書指導のあり方」

助言者 小池 隆（中信教育事務所）

司会者 浦野 啓子（飯山市立泉台小学校）

発表者 立花 尚子（上田市立川辺小学校） 塚田 敦子（坂城町立坂城中学校）

1 発表の概要

〈川辺小学校〉「子ども達が意欲的に取り組むことができる読書指導のあり方」

＊子どもたちの読書量の様子、読書活動…（①朝読書、②春の読書週間 ③秋の読書週間 ④図書委員会の活動 ⑤PTAボランティアによる読み聞かせ活動）についての発表。

秋の読書週間では、親子読書、高学年から低学年への読み聞かせの友遊読書、先生方の読み聞かせ、お話メニュー献立などが実施されている。

成果としては、読み聞かせにより、「集中して読む」ことが苦手な児童も楽しみながらお話を聞くことができた。給食との連携では掲示物や放送で意欲を高められた。友遊読書では、読み聞かせで相手意識を持って読むことができるのでそのような機会を増やしていきたい。

課題としては読書に集中して取り組むことができない子どもたちへの個別支援をどうしたらよいか。読む本に偏りが見られるので、ブックラリーなど工夫して、様々な本の活用を考えたい。

〈坂城中学校〉「読書指導について」

＊読書指導の取り組み…（読書オリエンテーション、朝の10分間読書、本にふれる機会を増やす学級文庫〈坂城町出身のセブンイレブン社長 鈴木敏文さん寄贈の文庫〉 生徒、係（全職員を含む）、ボランティアとの連携の読書旬間、貸し出し数増加につながる一人一言カードを書くなどの生徒会活動）

読書週間では、「金子みすゞの世界」「百人一首の世界」「生誕250周年 小林一茶」などのテーマを決めて取り組んだことにより、言葉に興味、関心が出てくる生徒がみられ、読書数の増加という成果につながった。



2 討議の概要

＊レポートを聞いて、A～Fの4～5人のグループでレポートの感想や学校での実践や課題について討議。その後、グループごとに話し合った内容を発表した。

A 塩尻市の巡回図書（国語の教科書に出てくるお薦めの本）の紹介。読書の個人差。

B 朝読書のオリエンテーションがよい。お話に出てくる食べ物、ポスターや放送で気分を盛り上げて楽しく給食を。

C 本を読まない子への対応としての読み聞かせの有効性。図書館に来る子たちへの声がけ。

D 本との出会わせ方。朝読書が図書館利用に結びつかないのが課題。読書旬間でテーマを決め全校一体となることができるのがよい。

E 朝読書のねらいは？図書館の装飾（本の紹介文など）は効果的。

F 鈴木文庫がすばらしい。読書の質を上げていく活動が必要。



3 まとめ （助言者の指導を含む）

① 読書指導の視点から 環境整備、蔵書の充実、委員会活動の充実を。

② 授業と図書館の関連 指導要領を読み、明確な視点を持って授業、図書館の活用を。

思考力を高めていくために、言語活動を充実させましょう。

図書館を利用する子どもに育てましょう。

第9分科会 読書指導のありかた

助言者 春日 直史 (総合教育センター)

司会者 米山 郁子 (長野市立 通明小学校)

発表者 高沢 佳代子(山ノ内町立 南小学校) 村山 菜保子(松本市立 女鳥羽中学校)

1 発表の概要

A)長野市立通名小学校 テーマ:本に興味を持ち読書の幅を広げるための読書指導。

毎日の読書は帯。週1時間の図書館の時間はあり、司書に読み聞かせをしてもらっている。

貸出状況は、9分類が多く他の分類の本が少ない。→9類以外の本に意識して目を向けさせるように図書館教育係だけでなく、図書館司書、PTAの協力を得ながら取り組んだ。

① 季節に応じたコーナーの設置。図書館便りの活用。

1学期:七夕飾り→星、星座の本へ。

低学年…短冊に欲しい本を買ってもらい図書館前に展示。希望の中から選書して購入。

高学年…授業の時間にも話をもらった。4類の貸し出しが増えた。

2学期:虫の鳴き声クイズ(8~9月)図書館便りにのせた。図鑑で調べ、正解するとバランストンボがもらえる。

ハロウィン(参加型10月)…折り紙や新聞紙でかぼちゃを作る。

探してみつけて読んで図書券ゲット!…図書館にある様々な分類の本を読んでもらう。

→こだわりの強い子の対応が課題。

② 読書わくわくタイム… PTAとの連携、外部講師への依頼。

PTAの親子委員に図書館の本や大型絵本(公共)を読んでもらう。

→身近な保護者が読聞かせをするので、堅苦しくなく好評だった。

お家の人にも子どもが楽しんでいると知ってもらうことによって家庭での読書へとつながる。

外部講師へ依頼。(人形劇やブラックシアター、語りなど)子どもたちが読書に興味を持つ活動をしていく事が大切。

B)松本市立女鳥羽中学校…生徒会活動、教科指導の中での読書指導について。

朝読書…(水曜日以外)10分間 どの学年も落ち着いて読んでいる。

図書館の本でなくてもよい→図鑑、携帯小説などさまざま。偏っている。

① 読書駅伝…各クラス 4~5人の生活班でチームを作り、0~9、Eの本を読み、書名と印象に残った1文をエントリーシートに書き込む。クラスのチームがすべて提出されたら完走。

全校で完走を目指す。

抜き出した1文がキャッチコピーになっていて、それを読みながら借りる子が出てきた。

司書に場所を聞きながら借りていく子が増えた。

課題…とりあえず借りて読まずに返却したり、適当な1文を選んで書いた生徒がいた。

読書経験の少ない生徒は本の帯や袖に書かれたコピーをそのままうつしていた。

② 読書案内の交換…夏休み前にすすめる1冊 3年生は1年生に向けて本を紹介した。

キャッチコピー、あらすじまたは内容紹介、セールスポイントを必ず入れる。

2.グループ討議 a) 興味を持たせるためにどんなことをやっているか各校の実践。

b) 委員会の活動など。

共通)子どもたちは先生が何をしているか見ている。是非一緒に読書をして欲しい。

3.まとめ

図書館教育と教科の国語は一致しない。重なる部分は少ない。図書館教育は深くて広い。

共通しているのは、子供たちに図書館に足を運んでほしい。図書館にきたらさまざまなジャンルの本を読み、幅を広げてほしい事。

それには、目に見える形で子供に興味を持たせること、子どもたちのための図書館をつくる事が大切。司書教諭、図書館司書の連携が重要になってくる。

第10分科会

司会 高砂努（諏訪二葉高校）

① 授業 de ブックトーク

金山幸信（蓼科高校英語）・蓬田美智子（蓼科高校学校司書）

蓼科高校では「ブックトーク（＝図書館）」という言葉が定着している。読書週間にはクラス担任以外（校長教頭含む）の先生方による SHR でのブックトークも行われており、生徒たちは楽しみにしている。英語の授業のなかにブックトークを取り入れることで、教科書の内容の理解が深まり、読解力を高める結果につながった。生徒に「わかる喜び」を感じてもらえる授業にな



った。
図書館にある本を使うことで、自分で手に取れる、リアルな出来事として、教科書の世界から一步踏み出し、授業後にも学習が広がる。

大切なのは、ブックトークの内容を司書に丸投げするのではなく、事前に十分な打ち合わせをして、授業担当者がこの授業で生徒に何を伝えたいかを共有すること。必要に応じてブックトークのリハーサルもして授業に臨む。

最後に披露していただいたブックトーク実演は、どのクラス・講

座で授業を実施するかによって、生徒の顔を思い浮かべながらブックトークの内容を考えるなど、日ごろから生徒のことを知り尽くしている司書ならではの一人ひとりに話しかけてくれているような距離感。

② 図書館を使った授業をデザインする

椿宏尚（松本工業高校理科）

授業をもっと面白くしたい！アクティブ・ラーニングを求めて教室を飛び出した椿先生がたどりついた場所は図書館だった。情報検索能力を身につけさせたい。教科学習を通じて共同作業の経験をさせたい。模造紙にぴったりの広い机もあって、しかも図書館には司書がいる。相談に乗ってもらえる。資料を集めてくれる。授業中に片付かなくても、放課後の生徒の面倒も見してくれる。（もちろん授業時間も一緒にいてくれる。）

授業の何倍も予習をしつつ、持ち前のエネルギーで模索する実践の数々。

10 年研に続いて再会したという金山・椿両先生。これからも楽しみです。



第 11 分科会 図書館と図書館サークル FLC 学生との協同

司会者 竹重 みさ子 (長野大学附属図書館)

発表者 須田 智里 (上田女子短期大学附属図書館)

1. 発表の概要

配布資料に基づき説明

○ 発表者の自己紹介

○ 上田女子短期大学の紹介

○ FLC とは

Future Librarians Circle 2010 年に司書課程の学生が中心になって始めたサークル。

○ FLC とかかわる教職員

教員 2 名と図書館司書 1 名がかかわっている。

○ 附属図書館での活動

書架整備、七夕飾り、FLC 通信、お茶会、学園祭

○ 学外での活動

塩田公民館での活動：絵本に出てくる料理づくり

公共図書館での読み聞かせ：「図書館員と図書館員のたまごたちによるおはなし会」

(略称『とたま』)、上田情報ライブラリーにて。読み聞かせのほか、子供たちの絵本
選びの相談に乗る。

上田市内図書館バスツアー

上田市近隣の公共図書館開館準備

附属幼稚園での活動：絵本の装備等

○ 学生の活動：自分の得意なことを見つけて活動する。自発的に活動している。

○ FLC と教職員との関係：学生は自分で考え、工夫し活動する。教職員は活動の場を作る
役割。

○ 学生が仲間・教職員・図書館員・図書館利用者と出会うことで「化学反応」が起こり、
いろいろなことを知ったり発見する。

○ 私たちにとっての「協働」とは、学生の出会いの場を創造すること。

2. 討議の概要

○ 他の図書館における、学生との協同の事例について

- ・ ラーニングアドバイザーとの協同や、図書館広報やイベントを協同で行っている事例、
組織化までとはいかないが個々の学生にボランティアの依頼をしている事例等報告があった。
- ・ 現在は学生との協同はできていないが、そのような活動を模索している図書館も多かった。

- ・ 学生との協同における課題として、人が集まらない、うまく組織化できない、活動が
継続していかない、といった点が挙げられた。また、上田女子短期大学の事例の中で、
学生の自発的な活動に対して教職員がどのように関わるか、という点について、質問が
多く出された。

○ その他、文庫本の購入について、絵本の選書について、ブックハンティングについて等の
情報交換があった。

3. まとめ

今後も、県内の図書館の間で情報交換をすすめていきたい。

第12分科会 「みんなでやってみよう！絵本ではじまる学校応援団」～上田市立南小学校の事例から～

助言者 小室邦夫(源池小学校校長)

司会者 横山佳栄(上小・東御親子読書推進の会)

発表者 倉嶋隆雄(南小学校教頭)

伴美佐子(上田市教育委員会生涯学習課)

1. 発表の内容

第1部 「絵本ではじまる学校応援団」～南小学校での事例から～ 倉嶋隆雄先生よりPCのパワーポイントと映像を見ながらのお話と質疑応答

お話の概要:南小では、以前より読み聞かせのPTAサークル「パンプキンズ」の活動として朝の読み聞かせ(2回/月)と読書旬間中の45分枠のパネルシアター・大型絵本・紙芝居等(1回/年、手作りも作品ある)が恒例となっている。朝は、各クラスに年に2、3回ずつ入ってもらっている。

平成25年は開校30周年にあたり、その記念行事のひとつとして、学校応援団を募集した。公民館へも協力を求め、地域の人材を学校に向かい入れていた。読み書かせ教室の参加者や個人で読み聞かせ活動をしている人の紹介もあった。そこで、書道・学習支援・フォークダンス等と並んで、地域の力を朝の読み書かせでも活かす事とした。

まず、公民館で話し合いを設け、ルールの確認をしたり、当番を決めた。読み聞かせ終了後は打ち合わせを学校図書室で行い実施記録をする。今後は研修会も予定している。子どもたちは色々な人と繋がりの中で学ぶことが大切である。子どもと本をつなぐ読書活動も地域の人と繋がりで更に広がっていく。

質疑応答:分科会参加者の各自の活動経験を踏まえた具体的質問と実践的提言が6名よりあり、倉嶋先生と伴さんが応答した。

第2部 「今の子どもたち取り巻く問題」 伴美佐子さんよりPCのパワーポイントを見ながらのお話(参加者がクイズに全員で回答したり、グループワークありの参加者思考型)と読み聞かせ

お話の概要:まずクイズによる、長野県の人口は、210万人(＝全国の引きこもり者数)、子供は18万人、高齢化率28%、共働きは全国2位等がある、次にグループワークで、参加者の子供の時に比べ現在の遊びがゲームに変わっている。更にクイズによる、そこに「三間(時間・仲間・空間)の喪失」がある。クイズと組み合わせの計算によって、閉ざされがちな子どものおかれた人間関係がある。窓の外を眺める後ろ姿の子どもの絵にどんな声をかけるか？1人の子どもにひとりでも多く声をかけていける取り組みをしたい。子どもの気持ちを感じていこう。

読み聞かせ:「おこだてませんように」作:くすのきしげのり 絵:石井聖岳

2. 助言 小室邦夫先生のお話(金田一瑞穂さんの随筆の一部紹介資料配布あり、導入はダジャレ的昔話)

お話の概要:阿南町では高齢化率42.5%で全校40名の中学で学校応援団の募集に82才の方の参加あった。源池小では、PTAとOGの会・松本市お話の会・素人の会がやっていた。発表の南小は大規模校で、色々な子どもたちがいて一斉に全23クラスに読み書きせに入ることも大変である。学校内だけでなく、人との繋がりを学べ、地域の読書ボランティアグループが入ることも大切である。分科会参加者6名からの質問意見は、それぞれに、この分科会で学びたいという熱い思いが伝わった。地域の方の力を借りて、子どもたちをどう育てていく事もよい。担任が傍で見るのも良いし、学校の責任の元での活動である。活動の反省があれば次の課題も生まれる。コミュニケーションの能力が不足しコミュニティの崩壊も起こる。伴さんの語りかけに笑いが起こり、読み書かせ「おこだてませんように」に感動した。読書は地域の連携にも支えられる。読書ボランティアによって心に豊かな風を吹かせられる。本は子供の心を大きくしていく。本は大きな影響を与えてくれる。ビクトル・ユゴーは言った「大海より壮大なものは大空、その大空より壮大なものは心である」と。TV報道によると、3.11で被災し家族を失った小3の少女の宝物は本とノート、願いは友達の幸せ・笑顔・それが叶う事であるという。子どもの可能性を引き出すのは、幅広い人間関係と本との出会い。学校だけでは育たない。子どもが育ち、家庭・教師・大人も育つ。学校・家庭・地域住民の関係者が協力し連携しなければならない。(尚、導入の話は割愛する)

記録者 横山富美子(上小親子読書推進の会)

第 13 分科会 ① 公共図書館における特別支援サービス ～役割と課題～

② 録音図書への取り組み

助言者 増澤 雅彦（長野市立長野図書館障害者ライブラリー）

司会者 小林 敬治（安曇野市教育委員会文化課図書館）

発表者 奈良澤 一恵（安曇野市中央図書館）

望月 みどり（安曇野市中央図書館朗読協力者）

朝倉 康直（安曇野市あずみ野眼科）

仲谷 美加（大町市朗読グループかっこう）

1 発表の概要

① ◇安曇野市中央図書館 奈良澤 一恵

平成 17 年 10 月安曇野市が誕生、中央図書館建設（穂高）へ向け市社協と連携し障がい者サービスの在り方も検討

平成 20 年頃から視覚障がい者を対象とした（対面朗読、録音図書郵送）サービスを開始
朗読協力者の募集、養成講座、職員研修、朗読協力者研修会（デイジー化に向けて…）

平成 21 年 9 月、中央図書館開館 対面朗読室（防音に問題）、拡大読書機を設置

平成 25 年、広報「あづみの」の音訳録音と郷土資料の試験的録音製作

現在 音訳者 20 名 編集者 15 名 職員担当 6 名

課題：利用者の拡充（伝え方）音訳者、編集者の育成（継続性） サービスの在り方、方針

◇安曇野市中央図書館朗読協力者 望月 みどり

個人のため活動が楽 有償ボランティアなので良い録音に心掛ける 現在 6 名

課題：郷土の本を読んでいるが読み方の加減が難しい 担当者 4 名の時間の調整が大変

◇あずみ野眼科 朝倉 康直（違った視点でのサービス）

視覚障がい者の現状 外界からの情報は目で 80%~90%取得 中途失明者が増加

情報の入手が困難（点字を使える人が少ない等） 視覚障害者＝情報障害者

音声パソコン…インターネットを使い H P、本が読める等（100%は読んでくれない）

2003 年 2 月「あづみの音声パソコン教室」の誕生（治療は必要なくなるがケアは必要）

目標：視覚障がいがあっても「にこにこ」と豊かな生活を送るために何でもやろう

10 年続けてきて生きる希望の場所に少しはなれたかな…一度見学に来てください

② 大町市朗読グループかっこう 仲谷 美加

10 年間、機材の扱いが困難、利用者のテープ主流等でデジタル化になかなか進めなかった

平成 19 年民間から寄付を受け DR-1 等の勉強会を独自で少しずつ始める

平成 23 年音訳ボランティア研修会参加をきっかけに具体化

平成 24 年度全国基準に沿った録音図書を納める（MP3…貸出し用 DVD…保存用）

29 年間で テープ図書、303 タイトル デイジー図書、7 タイトル

その他声の情報活動（社協報録音、発送：かっこう便り…身近な話題をテープにて発送）等

障害に関係なく皆で同じ喜びを味わう、また利用者の声を糧に活動を継続

課題：読み手の好みの傾向、良質の録音等、若い方の参加を（PR ポスターの掲示）

2 まとめ（助言者より）

いろいろな立場からの話があり考えさせられ、また感銘を受けた。

図書館協力者（朗読協力者）は専門的な技術を持ってスキルアップを図りサービス

音声パソコンも資料として考えるが、人間の声で伝えることも大切

図書館としても情報を発信し、利用者の生活を豊かにするお手伝い（デイジーで情報発信）

第14分科会 テーマ「いくつになってもおはなし大好き！」

(1) 司会者：中村祐子（大町市読書ボランティアサークル連絡会）

発表者①小野理香子（池田町図書館）

大蔦奈美子・西村誠子・阪上晃子（おはなしボランティアあのねの会）

②久保里美・児玉道子・柳瀬恵美子・高橋美恵子・竹村寿子（朗読の会織音）

③一本木佐知子（大町市読書ボランティアサークル連絡会）

- ・おはなしを読む会「風車」の朗読道場
- ・大町北小学校 PTA サークル「おはなしスマイル」
- ・おはなしの会「やしろ」
- ・英語の絵本とお話を楽しむ会「ことばの森」



(2) 発表の概要

各サークルの発足経過等報告後、実践発表及び
パネル展示を通じて、日ごろの活動を身近に感じてもらう。

①池田町「おはなしボランティアあのねの会」

【活動】保育園、養護学校、特養などの町内各施設や、要望があれば町外へも出向き
よみきかせや紙芝居、パネルシアターなど自分たちも楽しみながら続けている。

【発表】・小学部『わくわくタイム』でのよみきかせ

- ・絵本「このはなだれの？」・大型絵本「ありとすいか」
- ・『たんぽぽ学級』でのよみきかせ
- ・絵本「じゃがいもポテトくん」・しかけ絵本「ちいさくてもおおきな愛」

②松川村「朗読の会織音（おりおん）」

【活動】隔月開催の「おとなのためのおはなし会」で発表、ジャズ喫茶での語りなど
朗読から、小学校の読み聞かせまで幅を広げている。

【発表】・朗読「しょうがの手」「中くらいの妻」「義眼（入れ眼）」

- ・詩の朗読「わたしが一番きれいだったとき」

③大町市「読書ボランティアサークル連絡会」

【活動】◇BOOKBOOK（ブックブック）の開催

- ・年1回各サークルの活動発表や情報交換を行い、会員相互の交流、理解、連携を図る。

◇研修会（年1～2回）の開催

- ・おはなし会ミニ講座（小物づくり）・絵本のたのしみかた講座
- ・パネルシアター講座2回（図書館との共催事業）（素材やボード作り）

【発表】・小学生8人による詩や話の朗読

- ・絵本「いちべえぬまの101ちゃん」
- ・紙芝居「おにがしまのとらがり」（鬼のパンツのおどり等）
- ・絵本「Bark, George」（ジョージ、ほえてごらん）動物の鳴き声クイズ等

(3) 参加者の声（抜粋）

①分科会のテーマ「いくつになってもおはなし大好き！」は、とてもよいネーミングですね。

テーマにふさわしい取り組みが、様々な形態で行われている様子が伝わってきました。

②子どもたちの朗読や英語のよみきかせは特色があり、特に子どもの声はいいものですね。

③ボランティアの方が多いこと、そして、それぞれに工夫され、相手の立場にたった取り組みがされていることが素敵で、参考になりました。

④普段は行う側なので、実践発表を観て聴いてとても楽しかったです。